連載

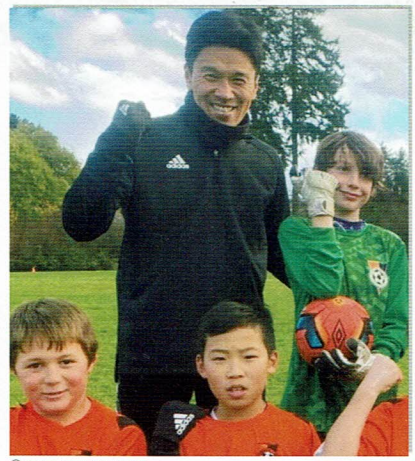
FOOTBALL マイノリティリポート

第40回

サッカー指導者 栗原克志（東京2020オリンピック／サッカーU−24日本代表コーチ）

男子サッカーがベスト4まで勝ち上がった今年の東京オリンピック。U−24日本代表コーチを務めた栗原克志は、その戦いを終えるとカナダへ渡る。〝サッカー先進国〟ではない北米の国をあえて新天地に選んだ理由はどこにあり、どのような夢を温めているのだろうか。

取材・文●手嶋真彦（スポーツライター）



©Katsushi KURIHARA

東京五輪U−24日本代表コーチが新天地に選んだカナダで温める夢

20年10月のオランダ遠征も国外へ移住するきっかけに

ヨーロッパのトップリーグで日本人監督が指揮を執っている。遠からず、それも単なる夢ではなくなっているだろう。栗原克志が、ぼんやり想像してきたそんな未来をより鮮明にイメージできるようになったのは、日本代表のオランダ遠征に帯同してからだ。

カメルーン、コートジボワールとの連戦に臨んだ2020年10月のそのオランダ遠征で、栗原が感じ取ったのは日本を代表するトッププレーヤーたちの無限とも言える可能性だった。それぞれが己のプレーに責任を持ちながら、要求すべきところは要求し合い、悪条件のピッチや悪天候下でも精度を落とさずやり遂げようとする。

栗原が感銘を受けたのは、代表選手たちのそうした真摯な取り組みや個々の技術力の高さだけではない。クリスチアーノ・ロナウドやロメル・ルカクといった世界最高峰のアタッカーたちとやり合ってきた吉田麻也を筆頭として、セオリーを超えた対応力を随所で発揮できるのだ。戦術の型をチームで共有し、オートマチックに連動できるのは日本の選手が得意とするところだが、その型を臨機応変に破れるのは、サッカーという競技の本質を深く理解しているからにほかならない。

キャプテンの吉田は、別のハードルも越えていた。流暢な英語でレフェリーと折衝するなど、異言語でのコミュニケーションをまるで苦にしていないのだ。コロナ禍ゆえの制約が重なり、オランダ遠征に招集できた25人の選手は全員ヨーロッパのクラブでプレーしていた。言葉の壁がなくなれば、世界的なトップリーグで指揮を執る人材も当然のように現われてくるのではないか。そんな日本人監督にどんどん出てきてほしい――。

栗原はそう願いながら、東京2020の五輪代表コーチを務めたあと、カナダへ渡る。異国で新たな道を見つけ出していくパスファインダー（先駆者）としての、自身の可能性を強く信じながら。

◇　◇　◇

異国で暮らすという選択肢が現実味を帯びてきたのは〝期限〟を意識するようになってからだ。栗原には子どもがふたりいる。彼らもやがて親元を離れていくだろう。この子たちと間近で向き合える時間はもう限られている。

子育ては妻に任せきりだった。サッカー指導者としての任務に追われ、学校行事にはほとんど参加できず、夏休みも一緒に過ごせていない。この繰り返しで本当にいいのかと自問自答している頃、不意に誘われた。ニュージーランドのサッカークラブで育成に携わってみないかと。

その少し前に、親子4人でニュージーランドを訪れていた。家族旅行であり、移住をいくらか視野に入れての視察も兼ねていた。現地の学校で授業風景や休み時間の過ごし方を実際に見学させてもらい、当時10歳と7歳の子どもたちが目を輝かせている様子を目の当たりにしてもいた。ここでなら家族との時間を最優先

にしながら、指導者としての幅を広げていけるのではないか。夫婦間でそんな話になったのが、2018年の暮れだった。

栗原は決意した。長年お世話になってきたアルビレックス新潟を19年シーズンまでで退団し、家族でニュージーランドへ移住する。アルビレックス新潟・シンガポール時代の3年間（05～07年）を含めれば、在籍15年目の決断だった。

思いがけない話が舞い込んできたのは、ニュージーランドへの移住を控えた19年のシーズンオフだった。五輪代表監督の森保一からコーチをやらないかと打診されたのだ。アルビレックス新潟で2年間ヘッドコーチを務めていた森保とは「よく面倒を見てもらい、可愛がってもらって、精一杯尽した」関係だ。ただ、すでにニュージーランドへの移住を決め、そのための準備も進めていた。結論を出しあぐねる栗原の背中を強く押したのは妻だった。こんな名誉あるお話を頂いて、いったい何を迷っているのかと。

前述したA代表のオランダ遠征に栗原は五輪代表コーチとして帯同し、その経験もまた国外移住に踏み切るきっかけとなる。ヨーロッパのトップリーグで日頃からしのぎを削る代表選手たちの逞しさを嬉しく思う一方で、自分もチャレンジしなければならないと痛感したのだ。指導者も負けてはいられないと。

幼い子どもたちの指導法をコーチングの基準に置いて

2021年9月、栗原はカナダへ渡る。コロナのあおりでニュージーランド行きは断念せざるをえなくなった。それでも移住をあきらめ切れなかったのは、親心が燻っていたからだ。日本の教育環境とはまた違った良さのある異文化で、ふたりの子どもたちが生き生きと成長し、それぞれの道を見つけていく姿を夫婦一緒に見守りたい。栗原自身は指導者としての幅を広げていきたい。子どもたちが英語を自然と身につけながら、希望する進路を選択していける、そのうえでサッカーの伸びしろが大きな国。2026年のワールドカップ共催が決まっているカナダは、多くの条件を満たしている打って付けの国だった。妻と子どもたちは一足先の21年4月にカナダへ渡航し、栗原は5か月後の9月に合流した。

朝になれば子どもたちを車に乗せて、学校まで送る。カナダでは平日でも時間がゆっくり流れている。栗原自身の心がほぐれているからなのか、これまでのキャリアを振り返るゆとりもできた。

栗原は高校卒業後Jリーガーとなり、4年後の1999年を最後にキャリアの変更を余儀なくされた。レベルの高いプロの世界で、常に背伸びをしながら、周りに置いていかれないように食らいつくだけで必死な4年間だった。

22歳で突然クビを宣告されたあの時の喪失感。当時はサッカーしかできないと思い込んでいた。明日からどうしよう。頭の中が真っ白になったそういう過去があるから、栗原は選手から指導者への転身後、常に危機感を覚えてきたのかもしれない。

指導者4年目の2003年には、インググランド南西部の港町をホームタウンとするプリマス・アーガイルの門を叩き、サッカーの母国でこの競技の本質に触れている。U-19のアシスタントコーチという肩書きは与えられたが、隣のピッチで練習していたトップチームの紅白戦などに人数合わせでよく駆り出された。

03-04シーズンのプリマス・アーガイルは3部で優勝し、続く04-05シーズンは2部に昇格する。ホームスタジアムに詰めかけるサポーターたちがどっと沸くのは、決まって後方からボールを大きく蹴り出し、勢いよく攻め上がっていく瞬間だった。キック&ラッシュの繰り返しになぜここまで盛り上がるのか、最初はよく分からなかった。やがて理解できたのは、肉弾戦が増えるその戦法自体が彼らを興奮させているわけではないということだ。得点を奪える可能性が少しでも膨らむから、サポーターたちは一斉に大声で叫ぶのだ。ダイレクトにゴールへと迫るサッカーの大きな醍醐味だった。

04年にはUEFAが試験をパスした受講生に与える「Bライセンス」を取得した。武者修業先のプリマス・アーガイルでは無給だったので、プロ選手時代の貯金が底を突くまで取り崩し、掃除のアルバイトもしながら貪欲に吸収したイングランドでの2年間だった。

カナダでは時間があるなら手伝ってほしいと頼まれ、栗原の息子が所属しているサッカーチームのコーチをボランティアで引き受けている。週に2回の練習と週末の試合に顔を出す。

そのうち別のカテゴリーの子どもたちも見てくれないかと、そんな話も持ち掛けられた。快諾し、8人制の試合を息子と一緒に観戦していた時のことだ。試合中のピッチ上に、なぜか大人が4人いる。プレーしている子どもたちを事細かに指導しようとしているのだ。4人の大人は両チームそれぞれの攻撃コーチと守備コーチ。いずれもボランティアのお父さんたちだった。

「あそこにいられちゃ邪魔だよね。うるさいし」

栗原の気持ちを日本語で代弁してくれたのは、同じ試合を近くで見ていた自分の息子だった。

新潟時代の栗原はトップチームのコーチを長く務めているが、コーチングキャリアの初期などに学童や園児を指導した日々もある。以来、コーチングの基準に置いてきたのは、幼い子どもたちだ。まずは栗原自身に興味を持たせる。鬼ごっこでも、何でもいい。この人と遊ぶのは楽しそうだと感じてもらう。ボールを蹴るにしても、面白そうだ、真似してみよう。そんな関係を作ってから、子どもたちが熱中した頃を見計らい、少しだけその日のテーマを意識させる。楽しいから、集中できる。集中しているから、栗原の言葉がストンと落ちていく。この原理は、大人にも当てはまるというのが栗原の経験則だ。

選手である子どもたちではなく4人のコーチが主役となっていた例の出来事は、事前に仕入れていた情報どおり、指導者が不足しているというカナダの現実を物語っていた。おそらくは氷山の一角であり、同じようなハレーションは栗原の知らない現場でも起きているだろう。

東京オリンピックで同じ釜の飯を食った吉田麻也。代表選手から受けた刺激も、国外移住に踏み切るきっかけに。

5年後の2026年にアメリカ、メキシコと3か国で共同開催するワールドカップを控え、カナダでもサッカー熱が高まりつつある。北米を舞台とするMLSにはバンクーバー・ホワイトキャップス、トロントFC、CFモントリオールの3チームが参戦しており、カナダ国内でも2017年にプロリーグが発足してまだ間もない。21年シーズンは8チームで優勝を争った。

女子サッカーの世界ではカナダは強国のひとつに数えられ、実際に今年の東京五輪では優勝国となっている。しかし、男子サッカーに話を限ればまだ発展途上のカナダで、栗原にできることは少なくない。草の根でお父さん、お母さんの意識から変えていく。頂点ではプロクラブのいわば知恵袋にもなれるだろう。

まずはカナダという新天地で、家族4人が落ち着いて暮らしていける環境を整えながら、栗原は人に会い、情報を集め、指導者としての新たな道を模索する。不安が少しもないと言えばウソになる。けれど、ワクワクしている自分はたしかにここにいる。

自分でボールを蹴る時間を指導者こそ確保してほしい

ニュージーランドにせよ、カナダにせよ、英語圏の国を選んだのは何よりもふたりの子どもたちが人生の選択肢を増やせるようにするためだ。英語で何不自由なくコミュニケーションを取れるようになっていけば、世界は広がるだろう。

英語力は栗原自身の課題でもある。指導者としての幅をカナダで広げていくためには、英語を使いこなせるようになる道を避けては通れない。その道は、外国人監督に信頼される通訳兼コーチという栗原が描くビジョンにもつながっている。

「仮に自分が監督なら、通訳がどんなサッカー現場の経験を持っているか、すごく気になります。監督自身が大切にしている言葉を、妙に変換されて伝えられたらたまったものではないですからね」

9月に入ってカナダでも新学期が始まり、本格的に現地の学校に通い出した娘の国語の教科書は、1983年に日本でも公開された青春映画「アウトサイダー」の原作小説だ。独特の言い回しやスラングも多く、教科書を読んでいるだけではらちが明かない。そこで栗原は映画を借りてきた。作品の映像も参考にしながら、家族全員がリビングに集まり、ワイワイと小説の読解に立ち向かっている。

「そういう時間が貴重ですし、すごく楽しいです」

いつか持ちたいと願ってきた、ささやかでも幸せなひととき。シニアサッカーも同じだ。栗原はカナダでチームを見つけ、選手となった。オジサンたちが定期的に集まり、真剣にボールを蹴る。ずっと憧れていた余暇の楽しみ方を異国で味わっている。

©Katsushi KURIHARA

ボランティアで息子のサッカーチームのコーチを引き受けている。カナダで栗原にできることは少なくない。

連載 FOOTBALL マイノリティリポート

平日の夜に1回練習して、週末の試合に臨む。全力で走って汗を流しながら、実戦のさなかにふと思うこともある。

「自分自身で実際にプレーしてみると、あの伝え方じゃあ、伝え切れていなかったのかもしれない。選手たちには理不尽な要求に聞こえていたかもしれない。そんなふうに感じたりもしています」

自戒を込めて栗原はこう思う。頭でっかちにならないように、遊びでも構わないから、指導者も自分自身でボールを蹴る時間を確保してほしい。

シニアサッカーを始めてから、栗原は再確認できた。このスポーツはやっぱり楽しい。楽しいという感情こそ、挑戦の原点にある。原点に戻って、これまでのキャリアで得られた指導スキルや知見を整理し、まずは目の前にいる息子のチームの子どもたちに伝えていきたい。そんな思いがどんどん膨らんでいる。

◇ ◇ ◇

日本がベスト4まで勝ち上がった東京2020で五輪代表コーチを務めた貴重な体験は、途中のプロセスを含めて掛け替えのないものとなった。

「日本が歩みを止めなければ、簡単ではないですけど、目標に近づいていける。それぐらいの位置まで来ているのは、すごく実感できました」

栗原がイメージしているのは、こんな未来だ。ヨーロッパのトップレベルで実績を積み重ね、名声を確立した例えば長谷部誠のようなトッププレーヤーが、今季で在籍15シーズン目となったブンデスリーガでそのまま指導者に転身し、向こうのトップチームを率いて得られた収穫を日本のサッカー界にやがて還元する。

五輪代表で栗原が同じ釜の飯を食った吉田は、オランダのエールディビジでの2年半、イングランドのプレミアリーグでの7年半を経て、イタリアのセリエAでは3シーズン目を迎えている。若手では五輪に向けての準備期間中に「クリさん、ちょっといいですか」と居残り練習をリクエストしてくるなど、冨安健洋のサッカーへの向き合い方にはつくづく感心させられた。こうした選手たちに大きな期待を寄せつつ、栗原は栗原で日本サッカー界に貢献できる新たな道を異国で見つけ出そうと試みている。

「ゆくゆくは日本代表がカナダで開催されるワールドカップに出場する時、なにかしらの手助けができるようにこちらで暮らし続けていけたらいいなと。そんなイメージはやっぱり持っています」

この10月には、日本サッカー協会からJFA国際委員に任命されており、栗原自身が日本とカナダのサッカー界を結ぶ新たな架け橋となっていくに違いない。

もし可能であればと栗原が切り出してきたのは、そろそろ取材を終えようとしていた時だ。

「この記事をご覧になって、カナダのサッカーに興味を持っていただいた人のために、私の連絡先をどこかに載せてもらうことは可能でしょうか？」

欄外のメールアドレスがその答だ。果敢な挑戦者を応援しない理由など、どこにもない。

（文中敬称略）

プロ選手時代は主に左SBを務め、ジェフ市原でJ1通算38試合に出場。

栗原克志さんのメールアドレス：canada.soccer.kk@gmail.com